
現実の僕と、夢の中の自分

BCC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実の僕と、夢の中の自分

【コード】

N5049BA

【作者名】

BCC

【あらすじ】

本物の冒険がしたい。

勇者になりたい。

異世界にいきたい。

ぼくは、冒険がしたい。

そんな思いを持ち、何も変わらない平々凡々な高校生活を送るぼくがもうひとつの世界では。

日常と非日常が交錯するとき、物語は始まる？

【プロローグ】（前書き）

はじめまして。BCCと申します。

初作品・初投稿となります。

少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

まだまだ拙い文章しか書けぬ若輩者ですが、宜しくお願い致します。

また誤字・脱字・アドバイス・ご感想等、頂ける場合にはお待ちしていますので宜しくお願い致します。

【プロローグ】

別にすごく特別な人生を送ってきたわけではない。

普通に生まれて

普通に育って

普通に学校に行って

普通の家族と過ごして

普通の人生を送っている。

それがつまらないと気付いたのは

いつだっただろうか？

それが普通だと気付いたのは

いつだったのだろうか？

変わらない毎日。

変わらない日常。

だから、望んだ。

マンガのような、ゲームのような主人公に、と。

きつと、一度くらいなら誰もが願う願いだろうか？

だけど、そんな願い叶いはしない。

それが、現実。

なら、どうする？

だから、ぼくは 夢を見る。

非日常な日常1

いつも通りの光景が目の前に広がる。

森林。木々からの木漏れ日と爽やかな風。気持が安らぐ。

「ナオツ！なに、ぼっーとして！」

鈴の音が透き通るような声でぼくを怒鳴って、二つに束ねた長い綺麗な金髪がなびく。同い年くらいの、ものすごく綺麗な女の子。燃えるような蒼い瞳が印象的で、可憐な というにはあまりにも目つきが凶暴すぎる。というか顔の距離が近い！

「そんなに怒鳴らないでよ、エリ」

慌ててぼくは後ずさる。そんなぼくにさらに追い打ちをかけてくるように、修道服のような服を着た（それにしても、スカートが短い）エリは体ごとぼくに迫ってくる。

「ナオがいつーっも、のんきだからでしょ！」

ぼくは改めて、エリの顔をまじまじと見つめる。夜の色がそのまま染み通りそうなほど透きとおった白い肌は、日本人のものではない。こんな綺麗な子、普通じゃ、いない。

「いや、大丈夫だって。ちゃんと分かってるよ。化物退治だろ？」

そう言いつつ、前方にいる化物を見る。この世界ではよく見る普通の化物。オークだ。体長は2m強。体重は人間の優に七倍はあるだろう。格好は獣の皮を被っているという感じで、いかにも汚らし

く化物らしい格好だ。手には長さが4mはあるだろうという太い無骨な丸太を持っている。

「わかってるなら、もっとちゃんとして！」

エリがまたもやぼくに怒鳴ってくる。いくら化物との距離があつて、森の中だからといって声を出しすぎだろ！と思うが今は何も言わないでおこう。真剣になればいいんだから。

「…わかった」

ぼくの鋭い声を聞いて、ぼくの目を見て、エリは頬を染めてそっぽを向く。

ほら？簡単なことだ。だって、エリはぼくに惚れてるんだから。それが普通の反応だ。

「エリちゃん、ナオ君、ただいまーっ！」

そんな明るい掛け声と共に、ぼくとエリの後ろから小走りで行ってきたのは束ねていないストレートの綺麗な銀髪に、エリと同じ服、同じ顔。双子のユマ。エリがツンなら、この子はデレという感じ。

「ユマ、しっ—！」

人差し指を立て、ユマを注意するエリ。それに対して、ユマは「わっ！ごめん！」

と慌てふためく。これも、この世界なら普通だ。

「オークは何匹だった？」

ぼくが冷静にユマに問いかけると、ユマは慌てた様子から一転して、

落ち着いた声で状況報告をした。

「全部で四匹。目の前に見える二匹と、その後方、五十mに二匹。手前二匹は見たとおり武器は丸太、主な防具は無し。後方二匹は、武器は五メートルを超える無骨な大剣、防具は無し」

ぼくはその報告を聞いて状況を把握して、指示を出す。

「エリとユマは手前の二匹を。ぼくは奥の二匹を」
「そんなのダメだよ！」

ユマの慌てた声がぼくの言葉を遮る。

「ナオ君が危ないよ！」

ユマはぼくの心配をする。それが普通だ。
エリは不安そうな瞳をしているが、ぼくの目をみて分かってくれる。これも普通だ。

「…大丈夫だよ。いつものことじゃないか」
ユマに向けて笑顔で、諭すように優しい声でそう言った。
「……」

やや納得がいかないようだが、ちゃんと言うことを聞いてくれるよ
うで、頷いてくれるユマ。

「それじゃ、…いくよ。カウント。5」

いつも通りぼくがカウントダウンをする。

「4」

いつも通りユマと視線を交わし、軽く笑い合う。

「3

いつも通りエリと視線を交わし、真剣な顔で頷き合う。

「2

背中から、剣を抜く。

「1

足に力を込め、疾走態勢。

「0

ぼくとエリが爆発したように飛び出

日常な日常1

「なにを、ぼーっとしてる！春夏秋冬！」
低い中年男の声で怒鳴られる。

バシッ！

と、教科書の角で叩かれる。いや、角はひどいよ！

「~~~~」

痛みで頭を押さえているぼくを見て、クラスメイト達が笑っている。これが普通だ。いつも通りの光景。

「~~~~たく！お前はいつも、ぼーっとして！」

「……すみません」

いつも通り、先生に苦笑で返す。そうすれば、いつも通り。ほら、授業に戻る。これが日常。

横の席の奴が「ばーか」と口パクで言ってくるので、これまた苦笑で返す。そして、つまらない授業がまた始まる。普通のおっさん教師による、普通の古典の授業。

もちろん聞く気がさらさら無いぼくは頬杖について窓から、空を見上げる。

世界は今日も平和です。

つまり、……つまらないということ。だから、こうして夢を見ていたのに……。

失礼、確かに夢は夢なのですが……別に寝ている状態で見ているわけ

ではないんです。

まあ、なんとというか。はい。一言で言っただけ。妄想です。

夢と言えばカッコいいじゃないか！

でも、妄想と言えば変態じゃないか！

と、しかしですよ？好きな子のことで妄想することが男の子です。

いや、女の子でもしょうけどね？ああ、あの子はきつとああいう子なんじゃないか、とか、きつと家では家事とかしてるんじゃないか、とか。まあその他いろいろ。でも、これも結局は妄想でしょ？綺麗に言えば、その子に対する夢。理想。希望。

つまりは、ぼくの場合はそういう日常の延長にはなく、ぼくの求めるのは非日常だということ。けど、それは叶わない。

だから、世界を作った。

もう一つの世界。

ぼくの世界。

夢の世界。

ぼくは、いつだってその世界に行ける。もちろん、頭の中だけだから、誰も知らないし、誰も行けない。行けるのはぼくだけ。ぼくだけが存在することを許された世界。

ぼくが主人公。

ストーリーも自由。

設定も自由。

町も。

人も。

化物も。

ぼくによって作り出された、ぼくによるぼくのためだけの世界。

つまりは　ぼくが神様だ。

……。自分で言っていて、…恥ずかしくなる。人よりも妄想癖がある、と考えてくれればいいと思う。

そんな神様の名前は、春夏秋冬　ナオ。
今年高校生になったばかりの、十五歳。
痩せ型で、身長はクラスで真ん中くらい。
成績は中の上。

運動は、苦手だ。といっても、運動ができない人間というわけではない。上手いわけでもないが、へたいわけでもない。つまり普通。ただ、運動自体があまり好きではない。

家族構成は、父、母、ぼく、妹、の四人家族だ。
親父と母さんは外資系の仕事をしていてほとんど家にいない。
外資系の仕事をしているだけあって、家は裕福な方だと思う。
家事は一通りぼくと妹とでこなしている。
妹は二つ下で、現在中学二年生。
そんな普通の家庭で、普通に育った。それが、ぼく。

正直、いつからこの夢を見始めたのか…、ぼくは覚えていない。
ただ、気付いたところには、世界が始まって続いている。
いつ終わるのかも分からない。

だって、この夢を見ない日は無い。
三年前からは寝ても覚めても、この世界に行けるようになった。な
んどで聞かれてもぼくは分からない。誰にも分からないだろう。
ただ、夢の世界に行くようになって気付いたことがある。
ぼくは、こっちの世界が嫌いなのだ、と。

夢の世界では、たった一人の主人公。

現実の世界では、どこにでもいる、ただの一人の人間。何も変えられない。何も変わることができない。

世界を動かすことも、救うことも出来ない。誰かを助けることも、救うこともできない。

それなら、答えは明白だろう。ぼくは現実の世界では特別な人間ではないのだから…。

自分が特別で無い。つまらないありふれた日常。平凡。

朝起きて、

学校に行つて、

勉強して、

友達と話して、

帰って、

ご飯食べて、

風呂に入つて、

眠る。

その繰り返し。何度も何度も。

もちろん楽しいこともあれば、嫌なこともある。だけど、そんなの当たり前でしょ？

ぼくが望んでいるのは、一言で言うなら

『非日常的な日常』

矛盾していると思うかもしれないが、考えてみてほしい。

非日常になれてしまえばそれはもう日常になるからだ。

もっと、簡単に分かりやすく言えばこうだ。

『本物の冒険がしたい。』

キングダムハーツやキノの旅のように色々な世界を見て旅するのに憧れる。

世界を又に掛ける冒険がしたい。

不思議な世界を見たい』

さらに言えば、

『勇者になりたい。

主人公になりたい。

自分の為だけじゃない誰かの為に頑張りたい』

『異世界にいきたい。

不思議な仲間と出会って、半ば強制的に不思議な冒険に旅立ちたい。

不思議な武器を片手に世界を救う旅がしたい。

主人公になりたい。

心から泣いて笑える不思議な旅がしたい』

『ぼくは、冒険がしたい』

そんなことはできない。

そんなことはぼくが誰よりも痛いくらい一番良く分かっている。

だから、ぼくは夢を見るんだ。

ぼくのような日常に魅力を感じる人は、非日常において、毎日に変化で満たされているのだろうか。

なら、日常にいる人は？変化のないところにいる人は？

ぼくのように、非日常を望むと思う。

でも、考えてみれば日常を望む人も、非日常を望む人も、それは願いであり、夢であり、想像することだと思う。そう考えてみれば、

誰もがぼくのように自分だけの世界を持っているのではないのかな。

チャイムが鳴る。

授業が終わる。

帰りのHRがある。

放課後。

はい、家。

ぼくは部活に入っていないし、帰りに迎えに来てくれる幼馴染の可愛い女の子もいない。そしたら、現実はこのものだよ。言っただでしょ？平凡だって。現実の世界だって。

家から学校までは歩いて15分。ぼくは程よい距離だと思ってる。友達は大抵部活に入っているから、行きも帰りもほとんど1人だ。たまに、部活が無いやつとか、ぼくみたいに部活に入っていないやつと帰ることもある。

残念ながら、ぼくが親しくしている友達の中にとってもなくバカな漫画やゲームのようなキャラはいない。

と思うが、それもまたぼくの主観的な意見なので何とも言えない。平凡そのものの普通のクラスメイトだと思っっているし、時には一緒にバカをやったりする。

冷蔵庫を開けて、麦茶を飲んでいると

「ただいまー」

と、明るい声が聞こえてきた。妹だ。学校から帰ってきたんだろ

う。

家の兄妹の仲は、…至って平凡であると思う。平和である。仲が

悪いわけでもなく、特別良いわけでもないと思う。

「おかえり」

玄関の方を覗いて、麦茶を持ったまま片手を上げて返事をする。どうやら、今日の髪型はポニーテールのようだ。妹の学校は、キリスト教系の私立校なので、制服もシスターっぽいもので可愛いデザインになっている。

「あ、ナオ帰ってたんだ。今晚わたしが作るけど、なんか希望ある？」

聞いている通り、妹はほくのことと呼び捨てです。昔は、お兄ちゃんって呼ばれてたんだけどねー。

「そっか。親父と母さんは今どこにいるの？ご飯は別になんでもいいよ。琴乃こと乃が作る料理はおいしいから」

そう言って、キッチンの方にぼくは引っこんでコップを洗う。妹の琴乃は、なにやら玄関の方でゴタついてるようだ。と、思ったらいきなりぱたぱたと走ってきた。

「…じゃあ、今晚はナオの好きなシチューにする」

と、はにかんだ笑顔で言われたら断る理由もないわけで…。

というか、やはりというかなんというか家の妹は可愛いと思う。はっきり言ってもてる。それは、もうもてる。え？それは平凡で普通なのか？と思うかもしれないが、実際に妹がいる兄なら分かると思うが、可愛い妹がいるからと言って特別なことがあるわけでもない。家族なんだから、当たり前だとぼくは思う。

要するに生まれたときから一緒にいる妹なので、それがぼくにとっでは平凡で当たり前なのだ。だから、妹は妹だ。それ以上でもそれ

以下でもない。

しかし、妹はモテるのに何故ぼくは……。

「ありがとう。なんかぼくも手伝おうか？」

ぼくがこう聞けば、いつも妹はこう答える。

「ううん。大丈夫。ゆっくりしていいよ」

すっかりしてる妹だと思う。でも、母さんはほとんど家に帰らないので、実際大抵のことは二人でこなしてきた。ぼくも家事全般できるし、妹もできる…ようになった。…昔はひどかったが…。

「そっか。なら、ぼくは部屋にいるよ」

そう言っつて、自分の部屋のドアを開けて部屋に入る。

「うん」

と言っつ琴乃ことの返事を聞いて、ドアを閉める。

家はマンションの7階で、705号室。3LDK。部屋はぼく、妹、親父&母さん、それぞれの部屋がある。まあ、基本的に家にいるときはリビングにいる。ぼくが部屋に引っこんだのは宿題のため。言っつておくが、宿題くらいはする。成績も悪い方では無いしね。

ぼくの部屋の中は基本的にものが少ない。ベッド、勉強机、本棚、洋服タンス、小さいテーブル。テレビなんかはリビングにしかないし、ゲーム機もリビングにある。だから、ほとんど自分の部屋っていうのは、寝る、勉強、着替え、くらいにしか使わない。

でも、琴乃に勉強を教えるついでに一緒に勉強することもあるの
で、そのときはその時々で場所も変わる。ぼくの部屋だったり、琴
乃の部屋だったり、リビングだったり。

宿題がちょうど終わったところで、コンコンと控えめなノックが

ぼくの部屋に響いた。

そして、それにいつも通り優しく答える。

「どうぞ」

すると、琴乃がそおー、とドアを開き顔だけを見せていつも通りこう言った。

「ナオ、ご飯できたよ」

それに僕もいつも通りの答えを返す。

「わかった。今行くよ」

自分の部屋からリビングに出るとすでにテーブルに食事が用意されている。

シチューの良い香りがぼくの食欲を刺激して空腹を促す。

テーブルには4つ席があるが、大抵琴乃と2人なので使う椅子も奥の2つでお互いに向き合って食事する。

今晚のご飯は、クリームシチュー、サラダ、肉野菜炒め、白ご飯。きっと、肉野菜炒めは明日の弁当に入るのだろうということが予測できた。

「うん。おいしい」

ぼくは素直に感心する。琴乃の料理は日に日に上手くなってきている。

「そ、そう?…ありがとう」

褒められたのを照れているのか、どこかぎこちないけれど嬉しそうな笑顔を向けてくれた。

ご飯が終わって、ぼくが皿洗いをして、琴乃が風呂の用意。皿洗いが終わればぼくが先に風呂に入る。そしたら、後は一緒にTVを見たり、琴乃の宿題を見たりする。

いつもと変わらない日常。

けど、ここからは違う。

存在している世界が変わる。

「おやすみ琴乃」

「うん。おやすみナオ」

いつもどおりにおやすみと言い合って、部屋のドアを閉める。

さあ、ここからだ。昼の続きから始めよう。

ベッドに入って、布団を被り、準備万端。

始めよう。

ぼくの世界を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5049ba/>

現実の僕と、夢の中の自分

2012年1月14日00時46分発行